

ryuouiseki
龍王遺跡

福岡県八女市吉田所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第103集

2014

八女市教育委員会

龍王遺跡

福岡県八女市吉田所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第103集

2014

八女市教育委員会

序

八女市の西北部、広川町と境を接する吉田地区は古くから古代の遺跡や古墳群が数多く存在している事が知られており、現在でも相当数の土器や石器などの破片が地表に姿を現しています。その様相を見ると、当地区は2000年以上の歴史を継続している八女を代表する「古都」と表現しても過言でない状況です。

悠久の歴史を刻む吉田地区の中でも別格的な存在が史跡 八女古墳群に在る「岩戸山古墳」です。岩戸山古墳は墳丘長約135m、全長は170mを超えると考えられる北部九州最大の前方後円墳です。前方後円墳の形を採用しながら多数の石人石馬を古墳上に樹立し、一辺43mもある別区と言われる施設を付設するなど、非常に地方色の強い古墳です。

築造者と考えられている「筑紫君 磐井」は、時のヤマト王権に対する反乱伝承が古事記や日本書紀に記録されており、中央政権側からは長い間逆賊として扱われていましたが、最近の研究では中央勢力からの圧政に対し自らの勢力地域を守り、維持して行く戦いを行った人物であったと評価されるようになりました。

今回の報告は、岩戸山古墳の南側にある古墳外の斜面地において平成24年に確認された石製品の内容確認調査であります。発見当初に本石製品が石人に類するものか慎重に観察を行いました。結果、石人石馬に類する石製品であるとの可能性が高くなったため発掘調査に踏み切りました。

詳細な内容につきましては別稿に譲りたいと思いますが、この報告書が当該遺跡のみならず市内に点在する文化遺産、とりわけ岩戸山古墳を代表とする八女古墳群やそれらに伴う石人石馬について、より深く理解していただく一助となり、より文化財愛護の心を育むことに寄与出来るのであるならば幸甚の極みであります。

最後に、当該遺跡の発掘調査に格段のご理解を頂きました地権者様をはじめとする関係各位、及び、地元町内の皆様方には並々ならぬご協力と応援を頂きました。

深く御礼を申し上げますとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例 言

- 1 本書は、八女市吉田字龍王所在の龍王遺跡調査における発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が実施している。
- 3 本書に使用した現地測量図については調査担当者を中心として参加者で分担して行った。
出土遺物の実測については岩戸山歴史資料館において行った。
- 4 本書に使用した現地写真は犬塚が撮影した。出土遺物については岩戸山歴史資料館において犬塚が撮影した。
- 5 本書使用の方位については、すべて磁北である。
- 6 本書の執筆、及び、編集については犬塚が行った。
- 7 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は現八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

1	調査の経過	1
A	調査に至る経過	1
B	調査体制	1
2	遺跡の立地と歴史的環境	3
3	調査の内容	7
	龍王遺跡 発掘調査の概要	7
4	まとめ	14

図版 (PLATES)

挿 図 目 次

第 1 図	龍王遺跡周辺の遺跡分布図〔1/25,000〕
第 2 図	龍王遺跡 位置図〔1/5,000〕
第 3 図	龍王遺跡 平板測量実測図〔1/200〕
第 4 図	龍王遺跡 トレンチ平面実測図〔1/40〕
第 5 図	龍王遺跡 トレンチ西側土層断面図〔1/40〕
第 6 図	龍王遺跡 石製品 (S 1) 実測図〔1/4〕
第 7 図	龍王遺跡 石製品 (S 2) 実測図〔1/4〕
第 8 図	龍王遺跡 石製品 (S 3) 実測図〔1/4〕
第 9 図	龍王遺跡 石製品 (S 4) 実測図〔1/5〕

図 版 目 次

PL 1 ～ PL 4	龍王遺跡 発掘状況写真
PL 5 ～ PL 6	龍王遺跡 遺物写真

1 調査の経過

A 調査に至る経過

龍王遺跡が所在する吉田・龍王地区は下吉田遺跡群内にあるが、後世の削平・宅地化により周辺地形は従前に比し大きく様変わりをしているものと想像され、いわゆるノーマークに近い存在であった。しかしながら、平成24年度の上半期において地元住民から石人破片のような石製品が露出しているとの情報を得、現物確認を実施したところ半埋没状態の石製品1点、祠状の構造物内に3点、合計4点の石製品を確認した。前者は表面の一部に古式な工具痕が見られたが、後者については露出していた期間が長かったのであろうか、明確な痕跡が見つけられないでいた。しかしながら、状況的には同一的な性格が考えられたので調査に際してはこれら4点を含めて調査の対象とした。

当初、平成24年度は国庫補助において豊福地区所在の釘崎2号古墳の確認調査を予定していたが、石人石馬に類する石製品の発見により福岡県教育委員会 文化財保護課及び文化庁と協議の上、緊急性を考慮した上で事業内容の変更を行い本調査に着手した。

B 調査体制

【平成24年度】

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西島	民生
教育部長	井上	俊裕
文化課長	井上	富雄
同参事補佐	北島	一雄
同文化財係長	大塚	恵治（調査担当）
同 係員	永田	寧
同 係員	渡部	真弓

【平成25年度】

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西島	民生
教育部長	井上	俊裕
文化課長	井上	秀樹
同参事補佐	北島	一雄
同文化財係長	大塚	恵治（整理担当）
同 係員	永田	寧
同 係員	渡部	真弓

なお、発掘調査にあたり地権者である中島康子氏をはじめとし、近隣に居住される住民の皆様、そして吉田地区の方々には多大なるご配慮とご理解を戴きました。

また、以下の方々においては調査期間中多大な御指導・御協力を頂きました。記して感謝申し上げます。
(順不同、敬称略、当時)

文化庁 文化財部記念物課 水ノ江和同、福岡県教育委員会 文化財保護課 吉田東明、岸本圭、広川町教育委員会 生涯学習係 尾崎源太郎、みやま市教育委員会 生涯学習課 田中康信、猿渡真弓、筑後市教育委員会 社会教育課 小林勇作、大牟田市教育委員会 生涯学習課 中村歩

2 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は平成22年2月1日に旧八女郡に所在していた立花町、黒木町、星野村、矢部村の2町2村と合併し、福岡県下で2番目に広い行政区域をもった新たな「八女市」としてスタートする事となった。

現在、西を筑後市、東を大分県日田市、南を熊本県山鹿市と接する広大な県境の自治体となり、多様な生産活動が見られる希有な行政体となっている。東の山間部では杉や檜を中心とした林業が盛んであり、その地形を巧みに利用した文化的景観としての棚田も多数見られる。また、中山間部においては地域の気象条件の恩恵を受け、高級茶葉である玉露や良質な巨峰などの生産が盛んに行われている。平野部では福岡県産の苺の主力である「あまおう」や梨、電照菊などを生産している。

これらの生産活動を可能にしている立地は、耳縄山地と福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、大分県との境にそびえる釈迦岳山地に源を発し有明海に向け西流する一級河川である矢部川が形成したものである。流域面積647㎢を誇る福岡県下第3の大河であり、古来より水上運搬に供され現市域で行われた産業すべての要であった。

しかしながら、時代の流れとともに八女市内で生産される文物の大半は陸上輸送に徐々にシフトし、今では水上輸送手段はほぼ皆無となっている。

現在の交通事情を概観すると、八女市内には大分県まで延びる国道442号線が東西に走り、交通量の増大に比例しバイパス道路の建設・開通も急ピッチで進んでいる。また、西部地区には九州の大動脈である国道3号線や九州縦貫自動車道が南北を貫いており、八女西部地区はまさに九州のクロスロード的な性格を持っている。

【歴史的環境】

龍王遺跡は福岡県八女市吉田字龍王に所在している。

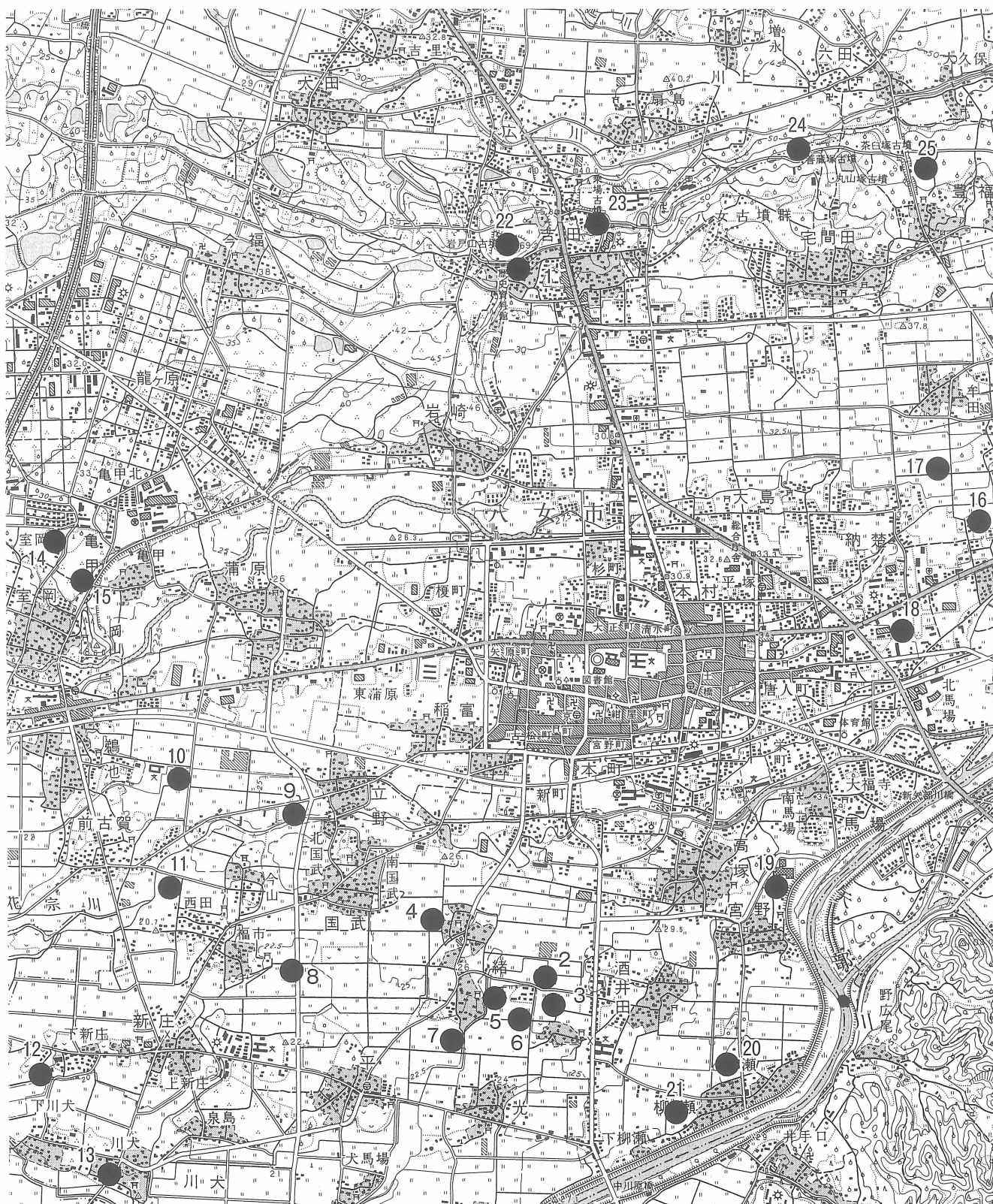
当該地周辺は下吉田遺跡群内に在り北側直近に岩戸山古墳を仰ぎ見ながら、後世の削平・宅地化により周辺地形は従前に比し大きく様変わりをしているものと想像され、いわゆるノーマークに近い存在であった。しかしながら、平成24年度の上半期において石人破片状の石製品が露出している事が判明し、当地区において、未だ岩戸山古墳の往事の姿を連想させる痕跡が遺存している可能性が大きくなった。

以下、八女市西部地区における概要を記し、当遺跡を理解する一助としたい。

(概要)

八女西部地区における遺跡の初現期は縄文時代前期まで遡る事が出来、国武遺跡群や平田遺跡群等では押型文土器が数多く出土している。同後期に入ると、南西部のアモメ遺跡において小規模な円形の竪穴式住居や、少数ながら墳墓が見られるようになり、移動狩猟採集生活から定住化の兆しが見られるようになる。

弥生時代に入ると、立野・大坪遺跡や亀ノ甲遺跡、宿町遺跡等の前期後半の環濠遺跡が出現する。立野・大坪遺跡や宿町遺跡は直径100m前後の貯蔵穴専用環濠と思われるのに対し、亀ノ甲遺跡の環濠は推定直径200mを超える大規模なものであり、全容は捉えられていないが環濠集落的な要素を持つ遺跡である。市内では未だ当該期にかかる本格的な稲作関連遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になる事が多く、これら遺跡の出現期には既に稲作が導入、または、定着していたものと考えられる。中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竪穴式



- | | | | |
|----------|--------------|--------------|-------------|
| 1. 龍王遺跡 | 7. 宿町遺跡 | 13. 川犬古墳群 | 19. 鍛冶屋遺跡 |
| 2. 深田遺跡 | 8. 中里遺跡 | 14. 西山ノ上遺跡 | 20. 茶ノ木ノ本遺跡 |
| 3. 京田遺跡 | 9. 立野・大坪遺跡 | 15. 亀甲遺跡 | 21. アモメ遺跡 |
| 4. 袴田遺跡 | 10. 樋の口遺跡 | 16. 平田・六反田遺跡 | 22. 岩戸山古墳 |
| 5. 野田遺跡 | 11. 川原遺跡 | 17. 西原遺跡 2 次 | 23. 乗場古墳 |
| 6. 二反田遺跡 | 12. 新庄・六反田遺跡 | 18. 熊野遺跡 | 24. 善蔵塚古墳 |
| | | | 25. 鶴見山古墳 |

第 1 図 龍王遺跡周辺の遺跡分布図 [1/25,000]

住居が散発的にしか存在しないようになり、環濠のように大規模な土木工事を伴う遺構は全く確認出来ないようになる。ところが中期後半頃になると、新庄・六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴うべき大集落形成の萌芽が見られるようになる。また、前述した立野・大坪遺跡などから鉄器が出土するようになるなど、その普及と前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取出来る。後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区に所在する野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡では鉄器や砥石が出土している。矢部川に面した南部地区では

現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に密集度の高い貯蔵穴群が発見されており、近くには墳墓群も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは方格規矩鏡、深樋式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭と共に、大規模集落同士の統合が進んでいる事を連想させる。

これと時をほぼ同じくして室岡台地上に所在する亀ノ甲・山ノ上周辺においても土地利用が再開し、地形を人為的に開削し前代とは比較にならない程の大環濠集落を形成する。西山ノ上遺跡や国道442号線バイパス建設関係の遺跡群がこれに該当し、特に前者においては原始鍛冶の痕跡とともに多量の鉄片、大陸由来の鑄造鉄斧片などの当時最先端の鉄素材が多量に出土するなど、一気に弥生時代における全盛期を迎える。しかしながら、西山ノ上遺跡が見せるように後期後半～末頃にかけて鉄素材を投棄したり、居住域を大幅に縮小する傾向が見られる。原因は定かでないが、瀬戸内地区で多く見られる高地性集落の発生時期と重なるところもあり、注意すべき点と思われる。

古墳時代に入ると、地域的な隔たりはあるものの、北部丘陵上（以下、八女丘陵）では4世紀前半頃から5世紀前半にかけて方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。辻の西遺跡（1・2次調査）や立山山古墳群がこれに挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っている事がわかる。5世紀前半になると八女丘陵上に大規模な古墳が次々に築造される。所謂、筑紫君一族が築いた八女古墳群であり、その初現は広川町所在の石人山古墳（108m）である。内部主体たる初期横穴式石室には直弧文を浮き彫りした家型石棺が納められており、最古級の装飾古墳としても知られる。5世紀後半代になると八女古墳群中から大型前方後円墳は姿を消す。しかし、これを補完するように瑞王寺古墳（直径26m 円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号古墳（墳丘長約47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後円墳）等の古墳が次々に築造される。しかし、50m前後の中規模から逸脱しない点に、首長墓系列の一時的な不在を読み取る事が出来る。6世紀前半～中頃になると、筑紫君全盛期を築いた磐井が築造した岩戸山古墳（墳丘長135m 前方後円墳）が出現する。日本書紀等にある磐井の乱後は、それまで単一的に連なっていた首長墓系譜が岩戸山以後は乗場古墳（墳丘長約70m 前方後円墳）、善蔵塚古墳（墳丘長約90m 前方後円墳）、鶴見山古墳（墳丘長87.5m 前方後円墳）など、複数の大型前方後円墳が出現し、首長系列の複数化を暗示している。6世紀後半代になると直径10m前後の小円墳が爆発的に増加すると共に、後半～末頃には前方後円墳は完全に姿を消し、童男山古墳（直径48m 円墳）などの大型円墳が出現する。しかし、7世紀初頭以後、これらの古墳に後続する大型古墳は全く見当たらず、歩調を合わせるかのように後期群集墳も姿を急速に消してゆく。

これらの現象を最後として、八女古墳群は終焉を迎える事となる。

3 調査の内容

発掘調査の概要

龍王遺跡はその名の由来となっている小字、龍王にある。

発掘調査の発端は地域住民の方からの情報提供であり、その内容は岩戸山古墳南側の民有地斜面上に凝灰岩製の大型石材が埋まっている、というものであった。当初、この情報は岩戸山歴史資料館にもたらされ、直ちに資料館より八女市教育委員会 文化課に連絡が入って来たものであった。

連絡を受け現地観察を行った結果、直径30cm程の円柱形の凝灰岩破片が地表面に露出していた。大半部分は地中に在るものと思われたが、その規模については明確には出来なかった。表面にはやや波だった感の表面調整が見られ、これを鑿状痕跡と考え、現認した凝灰岩破片は石人・石馬類のものと同様の石製品であると判断した。

この確認作業の結果について福岡県教育委員会 文化財保護課と協議を行い、平成24年度において採択された国庫補助事業である市内遺跡群発掘調査等事業の一部を変更し、本石製品の確認調査に切り替える事を確認した。

早速、八女市教育委員会から文化庁あて事業の計画変更申請書を提出し、後日文化庁より計画変更の承認が下り、平成24年12月11日から現地作業を開始し、本格的な確認のための調査を行う事となった。

以下においては、調査の結果について報告を行う。

A 龍王遺跡 調査

調査は主に露出石材の空間的・位置的状況の把握であったため、掘削を伴う調査は小規模なトレンチを南北に設定し、堆積土との関係を把握する事だけに限定した。

踏査の段階では露出石材の深度が分からなかったため、転落であるのか、樹立であるのか判断出来なかったが、いずれにせよ岩戸山古墳由来の遺物である事に疑いはなかった事から、埴輪片等の出土品に対しても表面検出も含め注意を払う必要性があった。

掘削調査の結果、周辺地も含めた堆積状況についての情報が入手出来たものの、全体的に遺物の出土量が少なく、調査では凝灰岩を除く土器等遺物の発見には殆ど恵まれなかった。

以下、今次調査に係る事実部分についてのみ言及し、全体像については後述する。

1) 立地状況と遺構

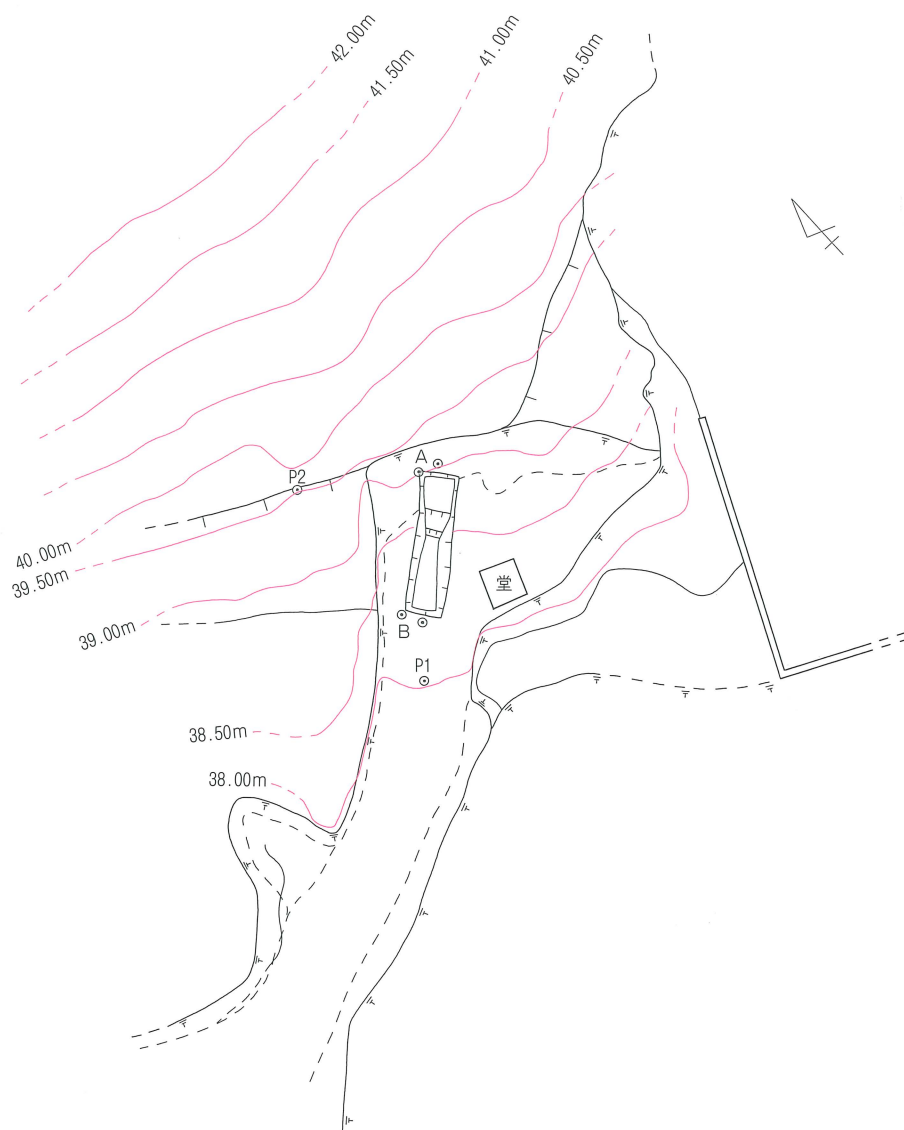
本調査区域は岩戸山古墳を基軸にすると、後円部中心より南南東120mの位置にあり、その比高差は約30mを測る。本地点に埋没している石製品の由来を調査するため長さ約4m、幅1m、面積4㎡の規模でトレンチ調査を行った。柱穴等、遺構の確認は出来なかった。

2) 周辺測量調査 〈第3図〉

(伐開作業)

地形測量に関しては過去の改変を大きく受けている事が予測される南側は避け、地形の改変が少ないと

思われる北側を中心に行う事とし、本格的な調査は予定地区の伐採から始めた。伐採開始直後の問題点として、十分な踏査を行っていなかった結果、竹林の堆積物の量を見誤ってしまった事が挙げられる。これは踏査時竹林内の奥まで事前調査時に立入りを行わなかった事が大きな要因であり、調査前に見積もっていた伐採物搬出量の数倍の量の竹材堆積物が存在している事が調査着手時に判明した。結局、伐採を行いながら堆積竹材の搬出も行った結果、当初計画よりも若干狭い範囲しか伐開出来ず、結果的に調査範囲は20m×20m、約400㎡を目標として作業を行わざるを得なかった。



第3図 平板測量実測図 [1/200]

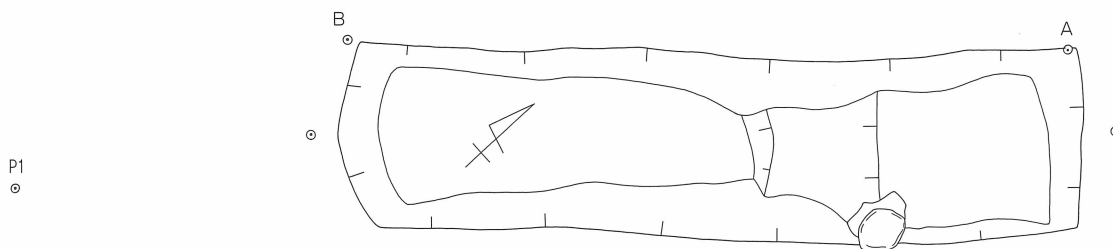
(地形測量)

地形測量はトレンチ掘削作業が一段落した頃より開始した。

周辺地景の概況としては、岩戸山古墳から直接連続する南側への急な傾斜そのままに、当該調査区まで斜面が延びている。調査区の東側、及び、南側は住宅用地として大きく削平され、比高差は最大で3m前後を測る。旧形を維持しているものと思われる傾斜面には目立った起伏もなく、東北東から西に向かうなどらかな等高線を形成しつつ、ほぼ等間隔で並列している。この状況は、人工的な構築物が存在する可能性が少なく、岩戸山古墳までの間にある傾斜地が特に人の手が入らぬまま現在に至っている事を示唆している。

3) トレンチ掘削調査 (第4図)

石製品が露出している地点より北側は35%の登り勾配となっており、かなりの急傾斜であったためトレンチの設定にあたっては露出地点から南側へ延長する事とした。また、調査は最小限度の現地変化に留める事を原則としたので、約4mの掘削しか行わなかった。



第4図 トレンチ平面実測図 [1/40]

伐採作業終了後、直ちにトレンチの範囲設定作業に着手した。トレンチ調査の主目的が石製品の位置確認であったため、石製品を南北に貫くようにトレンチ東辺を設定し、幅約1mで西辺を南側に引きながら全長4mのトレンチを設定した。トレンチ設定後、掘削作業に着手した。作業は予想以上に張り巡らされた樹木や竹の根に阻まれ、予定通りには進まなかった。特に竹の根は非常に固く、通常の道具では解決出来なかったため、木根裁断用の道具を揃えながら作業にあたった。

(トレンチ内出土の凝灰岩破片)

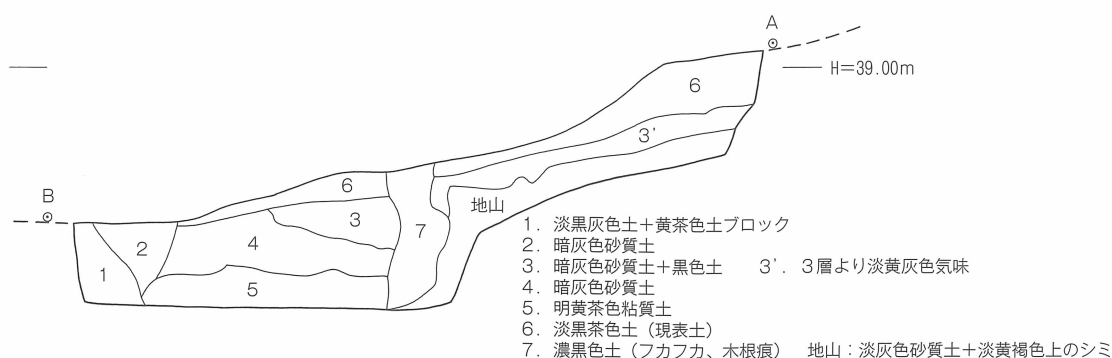
竹根を裁断しながら掘削作業を進めると、トレンチ南側の掘削面から半円形状の明黄褐色土が現れた。状況から近・現代の井戸跡ではないかと考えられる。検出状況を確認の上、現地撮影を行い掘削作業を進めた。第4層としている暗灰色砂質土と第5層としている明黄褐色粘質土の間から凝灰岩破片が複数出現し、数点は被熱痕が認められた。同時に近代の陶器片も出土していたため時期的には新しいと感じられたが、慎重に掘り出す事とした。掘削の結果、大小10数個の凝灰岩破片が出土したが、現地において行った表面観察では一部に人工的加工痕が見られたが、石製表飾品に多用される工具痕とは明確に異なるものであり、やや機械的に平面的な調整が施されていたため近現代に使用された凝灰岩製品の一部であろうと思われた。さらに掘削を進めると、同じく第5層の最下部から同様に凝灰岩の破片が出土した。第4・5層間からのものより若干大型の石材で、一部は基盤土（淡灰色砂質土＋淡黄褐色土のシミ）と考えられる土層の直上にあった。基盤土上という事もあり慎重に観察を行いながら調査を進めたものの、前述したものと同様、近現代に制作された凝灰岩製品の一部であろうと思われた。

結果、第4層から第5層にかけて出土した凝灰岩破片は、被熱を伴う個体も存在する事から凝灰岩製の竈、または、風呂釜の一部であると思われる。表面調整の在り方からも、石製表飾品の可能性は皆無に等しい。

(トレンチ内土層観察)

トレンチ西側土層において観察出来た土層は7種8層であった。

第1層～第5層までの堆積は現代(昭和前半代)における開削によるもので、前述した凝灰岩破片のほか、陶器類の破片も多数出土した。特に陶器類の出土が見られたのは第2・第4層であり、大きく開削した後にはやや雑に埋め戻しを行っているように見える。第6層（淡黒茶色土）は開削部分の埋没が終了した後の流入土であり、現表土でもある。第7層（濃黒色土）は現表土から進入してきた木根跡である。第3'層は第3層より淡黄灰色気味を呈する暗灰色砂質土で、土質や色調から旧表土、または、それに由来する土層であると思われるが、第6層との間に他種土層が無いと判然としない。



第5図 トレンチ西側土層断面図 [1/40]

(露出石製品)

現表土面に露出していた石製品について、現位置を保つものか否かの判断を行う事が本調査最大の目的であり、これを念頭に置きながら調査を実施した。

掘り下げを行うと、当該石製品の状況が判明した。概況としては、表土面下10cm～15cmのところ
で欠損し、残存部分はそこで終了していた。また、残存部分は基盤土（淡灰色砂質土+淡黄褐色土シミ）
に食い込む事無く、6層と3'層の境に欠損部が位置する事から、時期は不明であるが当該石製品は傾斜
面上部から転落した後、現位置に留まったものと考えたい。

B 出土遺物

凝灰岩破片資料（S1～S4）

S1（第6図）

S1は掘削したトレンチの北東隅に、地形上部から転落し現位置に留まったものと考えられる資料である。規模は、高さ18.3cm、横幅29.3cm、厚さ19.7cmを測る。上端部、及び、下端部においては大きく欠損しており、旧形状がどのような構造を成していたか不明である。しかしながら、周囲には少なくとも13面の面取りを施しており、また、表面の一部には幅4～5cmの工具痕跡が僅かながら遺存している事から人工的な手が加えられた石製品である事に異論はないが、その製作時期は伺いようがない。ただ、表面の風化具合が著しい事から、近現代のものではなく、工具痕跡から石製表飾品の可能性が高い。

岩戸山古墳出土の石製品中には多面に渡る面取りが施された製品は、現在のところ確認出来ないが、将来的な発見を示唆する遺物であった。

S2（第7図）

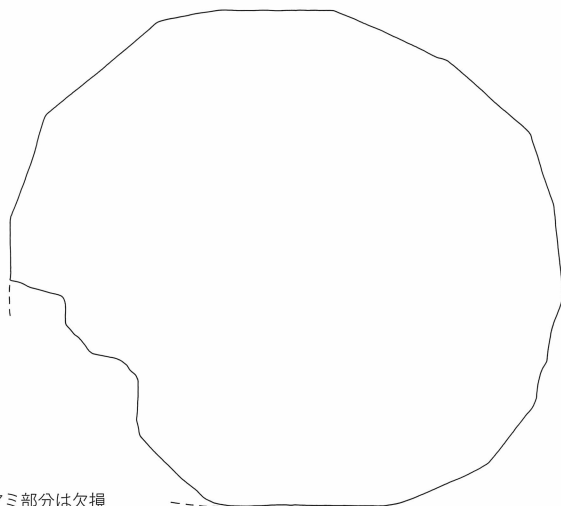
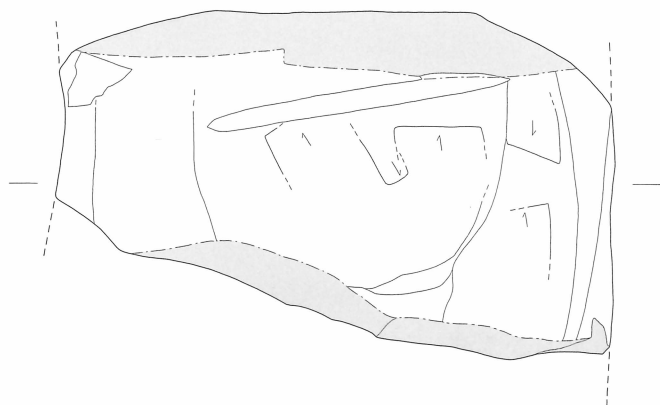
S2はトレンチ東側に建てられた祠状の構造物内に祀られるように安置されていた。S1同様、地形上部から転落した後、発見者により現位置におさまったものと考えられる資料である。規模は、高さ16cm、横幅23.3cm、厚さ17cmを測る。上端部、及び、下端部は大きく欠損し、旧形状がどのような構造を成していたか不明である。ただ、断面形は左右対称ではなく、左側に比して右側がやや細身になっていくことから、若干消極的ながら、石刀柄部の可能性も考慮して良いのではないと思われる。

S 3 (第8図)

S 3もS 2同様、トレンチ東側に建てられた祠状の構造物内に祀られるように安置されていた。地形上部から転落した後、人の手を介した後、現位置におさまったものと考えられる。規模は、高さ 26.1cm、横幅(最大) 18.3cm、厚さ 10.3cm を測る。上端部は大きく欠損しているものの、下端部の欠損は著しいものではない。平面形状及び断面形状から、やや小型の扁平石人の基部の一部であると考えられる。本来、当該部分は地中に埋没する部分である事から基部上部でない限り工具痕跡は殆ど遺存しない。加え、長年風雨にさらされていたのであろうか、表面の風化は著しく、痕跡を見出す事は困難であった。しかしながら、一部には鑿状の痕跡らしき跡が見られ、本品が石製表飾品(扁平石人)であった蓋然性は高いものと思われる。

S 4 (第9図)

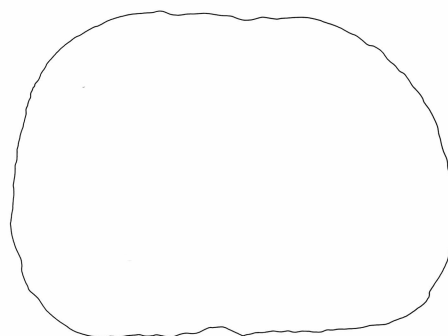
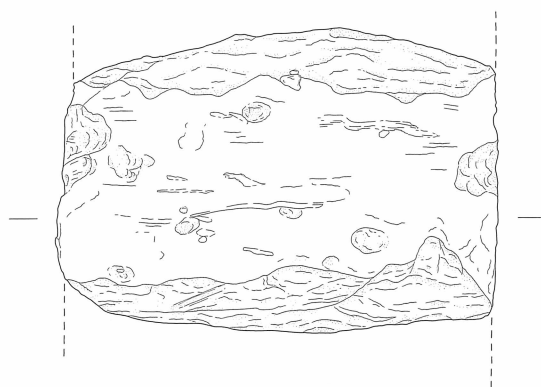
S 4もS 2～3同様、トレンチ東側に建てられた祠状の構造物内に祀られるように安置されていた。3個体中、最も規模が大きかったため、3段積みの最下段に横倒しとなっていた。地形上部から転落した後、人の手を介した後、現位置におさまったものと考えられる。規模は、高さ 37.9cm、横幅 27cm、厚さ 18.2cm を測る。上端部、及び、下端部は大きく欠損しており、旧形状がどのような構造を成していたか不明である。若干、特異な石製品であり、平面形・横断面だけならば円柱状の円体石人の可能性もあるが、縦断面形からは石刀の刃部の可能性も考えられる。表面には近現代に付けられたと思われる傷跡が残るが、概ね精美で、表面状態の大半は敲打、または、ミガキ的な手法により平滑化されている。また、平面形中央部付近には赤色顔料が遺存しており、黒紅色で厚みのある顔料である事から、古代に係る顔料の遺存と思われる。以上の結果から、本品の元形状については断定出来ないが、縦断面の状況を考慮すれば石刀の刃部である可能性が最も高いと思われる。



※アミ部分は欠損

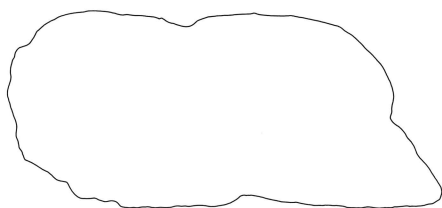
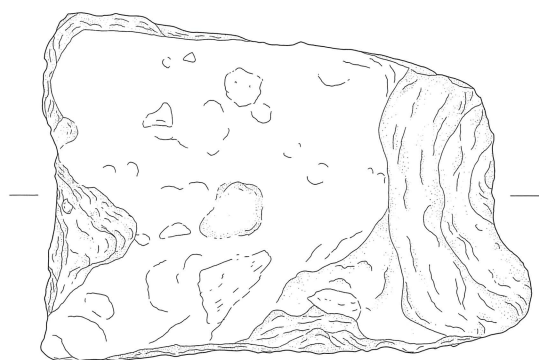
0 10cm

第6図
石製品 (S 1) 実測図 [1/4]

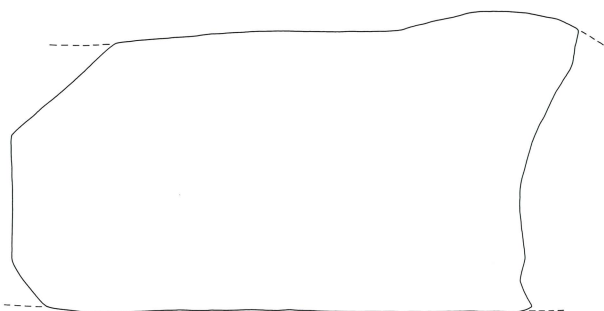
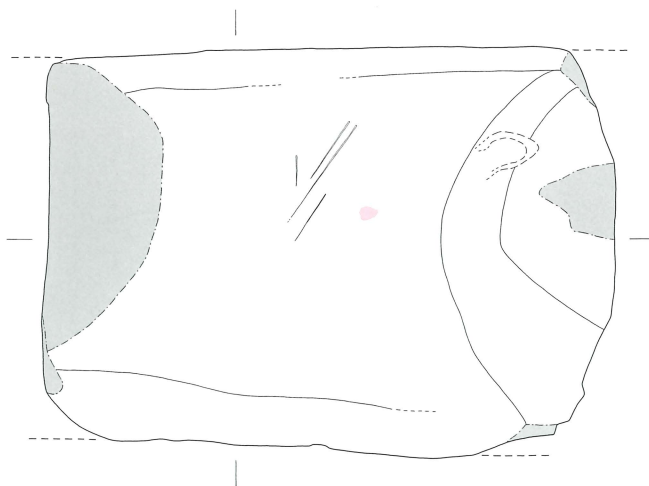
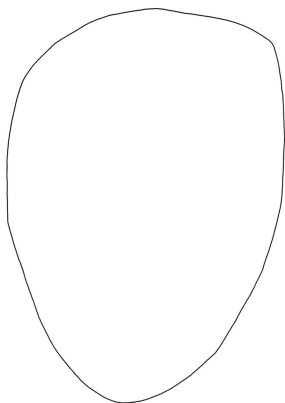


0 10cm

第7図
石製品 (S 2) 実測図 [1/4]



第8図
石製品 (S 3) 実測図 [1/4]



※アミ部分は欠損
※トーン部分は赤色顔料

第9図 石製品 (S 4) 実測図 [1/5]

4 まとめ

地域住民の方からの情報提供により始まった今回の調査では、岩戸山古墳の後円部南側に広がる傾斜面の一部が人工的な手が殆ど加わっていない旧来の姿を留めている、非常に希有な地形である事が判明した。また、その地に数点ではあるが、岩戸山古墳からの転落品と想定出来る石製品が確認された事は非常に意義深いものであった。

今回発見された石製品の種類については、破片が想像以上に小型であり全体像が見えない事もあり、想定にはやや困難な面がある。しかしながら、あえて言及するとすれば石製品 S 1（トレンチ内露出石製品）については直径や形状、表面の工具痕跡等から円体石人の基部、または、脚部の一部ではないかと想定される。また、調査区隣接の建物（簡易な祠状建物）内に所在していた3つの石製品の内1点については欠損断面が菱形を呈している事から石刀の柄部分ではないかと想定している。他2点については、特定に至る特徴が見いだしにくい小型破片であったため、種類の特定は行っていない。

岩戸山古墳の南側の諸地においてはこれまでに複数点の石製品が発見されており、中でも小型石人頭部や石鶏の頭部、鞍形石製品の一部に同心円が浮き彫りされている非常に珍しい特徴を有する石製品（前述3点については明確な石製表飾品）などが個人所有地内から出土している。

残念ながら、これらの発見地は住宅用地として開削されている場所であり、今後の新資料発見の可能性は低いものと思われる。しかしながら、当該調査区周辺には未だ旧地形を留めていると考えられる傾斜地が残されており、今後の展開次第では新たな石製表飾品の発見も含め、岩戸山古墳の知られざる側面の一部を垣間見る事が出来るかもしれない。

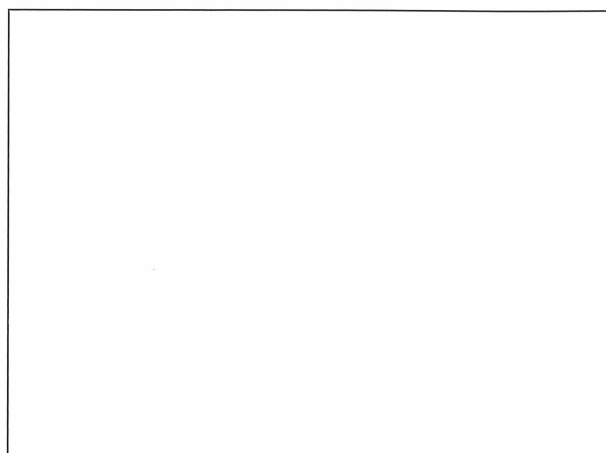
今後の岩戸山古墳に対する調査のベクトルは、本体における諸要素も重要であるが、古墳側面観等の地形的観点や古墳上に点在する古墳時代以外の遺物、そして周辺地中に存在するものと思われる、まだ見ぬ岩戸山古墳関連の遺物等にも向けなければならないものとする。

この事が岩戸山古墳の真の歴史に迫る近道でもあり、ひいては八女市に眠る潜在的歴史を明らかにする唯一の方法であると確信している。

PLATES

凡例

出土遺物に関する PL の記載は、以下の要領となっている。



出土場所

掲載番号



(1) 調査前風景 (南より)



(2) 石製品露出状況



(3) 竹林伐採状況 (南より)



(1) トレンチ掘削状況及び
周辺調査状況（南より） 1



(2) トレンチ掘削状況及び
周辺調査状況（南より） 2



(3) トレンチ一段掘下時状況
（南より）



(1) 石製品埋没状況（北より）



(2) 凝灰岩破片出土状況



(3) 凝灰岩破片除去後状況
（北より）



(1) トレンチ西側土層断面
(南東より)



(2) トレンチ全景 (西より)



(3) 基準点設置状況
(写真左 白色ポイント)



(4) 基準点設置状況
(写真右 木グイ)

PL 5





報 告 書 抄 録

ふりがな	りゅうおういせき							
書名	龍王遺跡							
副書名	福岡県八女市吉田所在遺跡の発掘調査報告書							
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 1 0 3 集							
編著者名	大塚恵治							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	834-8585 福岡県八女市本町 6 4 7 TEL 0943-23-1982							
発行年月日	西暦 2 0 1 4 年 3 月 3 1 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
りゅうおういせき 龍王遺跡	ふくおかけんやめしよしだ 福岡県八女市吉田 あざりゅうおう 字龍王	402109		33° 13′ 43″	130° 33′ 11″	2012/12/11 ～ 2013/1/31	4 m ² (トレンチ部)	遺跡内容 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
龍王遺跡	散布値	古墳時代、現代	なし	凝灰岩破片（石製表飾品含む）				
要 約	岩戸山古墳南側斜面において新たに石製表飾品が発見された。元位置か転落によるものか、理由を明確にすべく発掘調査を実施。結果、転落後の表出である事が明確となり、今後同様の発見がある事が推測される。							

龍王遺跡

八女市文化財調査報告書 第103集

平成26年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647

印刷 橋爪印刷
八女市吉田1899-1